

第1章 第1次世界大戦前のロシア帝国の国際環境

UENO Toshihiko, e-mail: uenot@mc.newweb.ne.jp; URL: <http://www.geocities.jp/collegelife9354/index.html>

1. ナポレオン戦争（「祖国戦争」）後の「ウィーン体制」

1.1. 神聖同盟の成立

1815年9月末、アレクサンドル1世（在位1801～1825）、オーストリア皇帝、プロイセン国王がまず締結のち、ローマ教皇、トルコ皇帝、イギリス国王の3者を除く全ヨーロッパの君主が加わるキリスト教国の君主間の友人的関係に基づく盟約で、政治・外交上の内容を含まず

1.2. 四国同盟の成立

1815年11月20日、イギリス、ロシア、オーストリア、プロイセンにより結成
ウィーン会議最終議定書による「ウィーン体制」を維持し、定期協議を開催して革命の防止、国際紛争収拾をはかることを目的とした。翌年、フランスが加わり五国同盟となる。

「ウィーン体制」下において、1853年のクリミア戦争まで、「ヨーロッパ協調」時代が続く。ロシアは、「ウィーン体制」下、旧制度の伝統による秩序の復興者・擁護者として、「ヨーロッパ協調」時代に主導的役割を果たす（＝「ヨーロッパの憲兵」）。

2. 領土拡大と東方問題

ニコライ1世（在位1825～55）の外交目標
①東方問題の有利な解決ニオスマン・トルコ帝国弱体化に乗じてバルカンの正教徒をトルコの支配下から救い出すこと
②ザカフカージエ（グルジアもアルメニアも正教国）の安全保障のために近東に進出すること

2.1. ザカフカージエ、中央アジア、極東への進出

1826～28年	ペルシアと戦って、アルメニアを獲得
1828～29年	トルコと戦って、ザカフカージエのほぼ全域を支配下におさめる
1830年代～60年代	ダゲスタン諸民族、チェチェン人、アディゲイ人らカフカース山岳諸民族との戦争（カフカース戦争）によりカフカース山岳地域の支配権を確立
1840年代	中央アジアへ進出
1858年	アイグン（愛琿）条約によりアムール川北岸までを領土とする

2.2. 東方問題

2.2.1. ギリシア独立支援を名目に露土戦争を開始

1821年～	ギリシア独立運動の激化
1827年10月	英仏とともにトルコ・エジプト（当時、トルコ支配下にあった）艦隊を破り、ギリシア独立を支援
1828年4月	ロシア単独でトルコに宣戦、アドリアノーブルを占領
1829年9月	トルコと「アドリアノーブル条約」を締結 ギリシア、モルダヴィア（現モルドワ）、ワラキア、セルビアの自治の承認

ドナウ川河口、カフカース地方の黒海沿岸のロシアへの割譲
ロシア船のダーダネルス、ボスポラス海峡の自由通航権の獲得
→欧州への穀物輸出の拡大
トルコ国内でのロシア産品の関税免除

2.2.2. エジプト問題

- 1831 年～ トルコ支配下のエジプト太守ムハンマド・アリーの反乱
ロシアはトルコを支援し、エジプトを抑える
- 1833 年 「ウンキール・スケレッシ（フンカール・イスケレシ）条約」締結
トルコと攻守同盟を締結
ダーダネルス、ボスポラス海峡の独占的通航権（ロシアおよびトルコ以外の国の船舶の通行禁止）の獲得＝ロシア外交の勝利
- 1839 年 フランスの支援を受けたエジプトがトルコと戦争
イギリス、オーストリア、プロイセン、ロシアの4国がエジプトを抑える
- 1840～41 年 「ロンドン協定」
①「ウンキール・スケレッシ（フンカール・イスケレシ）条約」の破棄
②ダーダネルス、ボスポラス海峡、平時にはすべての国の軍艦の通航禁止＝イギリスの対ロシア外交の勝利
→ロシア、この状態から脱することをめざしクリミア戦争を引き起こす

2.3. クリミア戦争

直接的原因＝エルサレム管理権をめぐる問題

- 1852 年 トルコ皇帝が、エルサレム管理権を正教徒から奪い、カトリック教徒に与える
- 1853 年 ロシアが、トルコに圧力をかけるも、英仏の支持を受けたトルコがこれを拒否
ロシアが、トルコの宗主権のもとに自治を与えられているモルダヴィア（現モルドバ）とワラキアに出兵
- 1853 年 10 月 トルコが、ロシアに宣戦
- 1853 年 11 月 ロシアが、トルコの黒海艦隊を全滅させる
- 1854 年 3 月 英仏が、艦隊を黒海に派遣し、対露宣戦布告
オーストリアとプロイセンが、ロシアにモルダヴィア（現モルドバ）とワラキアからの撤兵を要求
- 1854 年 秋～ クリミア攻防戦
- 1855 年 3 月 ニコライ 1 世急死
- 1855 年 9 月 ロシア軍が、セヴァストポリスを放棄
- 1856 年 3 月 「パリ講和条約」締結
ロシアは、カルスを放棄し、トルコはセヴァストポリスをロシアに返還
ベッサラビア南半部を失う
トルコにおける正教徒保護権を失う
黒海での艦隊保有権を失い、黒海沿岸の要塞の破壊を義務づけられる（黒海中立化条項）
ダーダネルス、ボスポラス海峡は、平時にはすべての国の軍艦が通航禁止となる

・クリミア戦争の敗北は、ロシアにとっては東方問題の解決の挫折→大改革へ

ただし、中央アジア・極東への進出は続く（1860年北京条約により沿海州を獲得）

クリミア戦争＝「ウィーン体制」の崩壊

3. 露土戦争

3.1. 三帝同盟

- 1867 年 オーストリア＝ハンガリー帝国の成立
- 1870～71 年 普仏戦争（フランスの敗北に終わる）
- 1870 年 10 月 31 日 ロシア、1856 年「パリ講和条約」の黒海中立化条項を破棄
- 1871 年 3 月 13 日 ロンドン会議、議定書調印
ダーダネルス、ボスポラス海峡通航許可権はトルコに残すが、ロシアは黒海における軍事基地建設、軍艦保有権を獲得
- 1873 年 5 月 6 日 「露独軍事協定」締結
- 1873 年 6 月 6 日 「露奥軍事協定」締結→「三帝同盟」の成立

3.2. バルカン情勢

- 1858 年 「モスクワ・スラブ福祉委員会」創設
オスマン・トルコ治下のスラブ民族の学校、協会、図書館に図書を寄贈
スラブ人留学生への支援
- 1866～68 年 セルビア人、モンテネグロ人、ギリシア人、亡命ブルガリア人、ルーマニア人による「バルカン同盟」結成
- 1875 年 ボスニア・ヘルツェゴヴィナで、トルコ政府による税金（キリスト教徒の軍務を免ずる代わりに徴収される税＝「ベデリ」）引き上げに反対して暴動が勃発
- 1875 年 12 月 30 日 オーストリア＝ハンガリー帝国外相アンドラーシ、三帝国の名において、バルカン諸民族の信仰の自由、ボスニア・ヘルツェゴヴィナから徴収された税金を当該地方のため支出することなどの改革案を提示
トルコはこれを見做す
ロシア内ではスラブ諸民族支援、反トルコ意識が高まる
- 1876 年 4 月 ブルガリア民族蜂起
- 1876 年 6 月 セルビア、モンテネグロ、対トルコ宣戦布告
セルビア軍を指揮したのはロシア人將軍
- 1877 年 1 月 ロシア、オーストリア＝ハンガリー秘密協定
オーストリア＝ハンガリー帝国は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ領有権をロシアが承認するという条件でロシアがトルコと戦う場合に中立を守る
- 1877 年 2 月 セルビア降伏
- 1877 年 4 月 24 日 ロシア皇帝アレクサンドル 2 世、キシニョフで、トルコに宣戦布告
- 1877 年 5 月 ルーマニアが独立し、ロシア軍と合流
セルビア、モンテネグロが再度、トルコに対し宣戦、ロシア側は、アドリアノーブルまで占領、ザカフカージエではアルダハン、スフミ、カルスを占領し、優勢に立った
- 1878 年 1 月 31 日 休戦協定締結
ブルガリアは自治公国、ルーマニア、セルビア、モンテネグロは独立国、ボスニア・ヘルツェゴヴィナは自治州となる
- 1878 年 3 月 3 日 ロシアとトルコ、「サン・ステファノ条約」締結

休戦協定の履行のほか、黒海・アドリア海両方に接する大ブルガリア自治公国が成立

ロシアは南部ベッサラビアを奪還、ザカフカージエではアルダハン、カルス、パトナーミを獲得

ロシアの南下政策をおそれたイギリス、オーストリア＝ハンガリーは、「サン・ステファノ条約」に不同意

1878年5月30日 露英秘密合意→ブルガリアの南北分割（バルカン山脈が境界）

1878年6月16日 英土「キプロス協定」締結

イギリスのトルコ支援、イギリスのキプロス占領の確認

1878年7月13日 「ベルリン協定」締結

ルーマニア、セルビア、モンテネグロの独立を承認

ブルガリアは分割

マケドニアはトルコに返還

ボスニア・ヘルツェゴヴィナはオーストリア＝ハンガリー帝国が占領

ベルリン協定の結果

- | |
|-------------------------------|
| ・ ロシアは地中海進出を阻止される |
| ・ イギリスとオーストリア＝ハンガリー帝国は漁夫の利を得る |
| ・ ドイツはトルコと接近する |

4. バルカン危機

1881年4月 ブルガリアでクーデター勃発

1885年 東ルーマニア（南北に分割されたブルガリアの南半部）で暴動、ブルガリアの南北統一を要求

1886年8月 ブルガリアで再びクーデター

11月 ブルガリアのロシア領事館、襲撃される

ロシアはブルガリアと断交

ブルガリアは親オーストリアに

ロシアは反ドイツ、反オーストリア、親フランスに傾斜

5. 第1次世界大戦への道

5.1. 第1次世界大戦への道

1907年8月 「英露協商」締結（ペルシア、中央アジアにおける利害関係の調整）

1908年秋 オーストリア＝ハンガリー、ボスニア・ヘルツェゴヴィナを併合

1911年8月19日 「独露協定」締結（ペルシア問題に関する利害調整）

1911年9月 リビアをめぐる伊土戦争勃発

トルコ、ダーダネルス・ボスポラス両海峡をしばしば封鎖→ロシアの穀物輸出に障害→ロシア国内に両海峡支配の要求

1912年6月 アルバニアで反トルコ反乱→トルコ、アルバニアの自治権を承認

1912年10月 モンテネグロ、トルコに宣戦布告

トルコ、急速イタリアと講和

セルビア、マケドニアの大半を占領、モンテネグロ、ギリシア、アルバニアを占領（第1次バルカン戦争）

	アルバニアの独立
1913 年 5 月	トルコが屈服し、講和
1913 年 6 月	マケドニア分割をめぐり、セルビア・ギリシアはブルガリアと対立（第2次バルカン戦）
1913 年 8 月	ブルガリアが屈服し、講和（ブルガリアは領土を失う→ブルガリアはドイツ、オーストリア・ハンガリーに接近）
	セルビアはオーストリア・ハンガリー領内の南スラブ人の解放をめざし、反オーストラリア=ハンガリー、親ロシアに傾斜

・ 正教徒の南スラブ人がオーストリア=ハンガリーと対立する状況は、スラブ人・正教徒の盟主を自認するロシアを必然的にオーストリア=ハンガリーとの対立に引きずり込んだ。
 ・ ロシアの工業資本家はドイツ工業との対抗意識を持っており、地主は穀物輸出をめぐってトルコとそれを支援するドイツに敵意を持つようになった。

5.2. 第1次世界大戦の開戦

1914 年 2 月 12 日	親英・親独派のココフツォフ首相が辞任し、反独派のゴレムィキンが首相に就任
1914 年 6 月 28 日	ボスニアのサラエヴォで民族主義者のセルビア人青年がオーストリア皇位継承者フランツ・フェルディナント夫妻を暗殺
	事件の背景にセルビア政府がいるとの憶測が流れ、新聞がそれを拡大し、ドイツに広まる
1914 年 7 月 23 日	オーストリア=ハンガリーが、セルビアに時限付き最後通牒
1914 年 7 月 24 日	ロシア外相サゾノフが、大臣会議でセルビア支持を強硬に主張。大臣会議は、オーストリア=ハンガリーに 48 時間の延長を、セルビアには譲歩を求める。
1914 年 7 月 25 日	オーストリア=ハンガリーが、セルビアと外交関係断絶
	ロシアは厳戒態勢に入る
1914 年 7 月 28 日	オーストリア=ハンガリーが、セルビアに宣戦布告
	ロシアは部分動員を開始
1914 年 7 月 29 日	ドイツが、動員令を発令し、ロシアには部分動員解除を要求して、威嚇
	ロシアは、外相・参謀総長が総動員を要求、首相は反対したが、ツァーリは総動員を決定
1914 年 7 月 30 日	ロシアが、総動員令を発令。ドイツも総動員令を発令
1914 年 7 月 31 日	ロシアが、御前会議で開戦を決定
1914 年 8 月 1 日	ドイツが、ロシアに宣戦布告
1914 年 8 月 2 日	ロシアが、ドイツに宣戦布告
1914 年 8 月 3 日	フランスが、ドイツに宣戦布告
1914 年 8 月 4 日	イギリスが、ドイツに宣戦布告
1914 年 8 月 6 日	オーストリア=ハンガリーが、ロシアに宣戦布告